

探訪記

小川・銚子溪谷から小羊鐘乳洞へ

三月・史談会定例現地研修会
三月二十一日、春分の日

三度目の正直という、今度又春天に急ぎ足で午前八時半、直川村から船越の峠を越して、先ず峠に出る。地元へ戸高五長さん、三台の峠で迎えて下さり、斧の製谷歩いで女の手輪塔を見る。香取川本流から殆んど十二軒の山奥に、いつ誰かの山に誰か建てて供養したものであらうか。ここには古い歴史があると思つた。

銚子溪谷は全くすばらしい。銚子淵、雄淵、雌淵、乙淵と大小多数の淵穴(おうけつ)の連続である。そして銚子の滝がかかっている。水ノ力が何千年何百年の時をかけての大彫刻である。深谷一帯の盛衰を暗いようなしげつ古美樹と屏風を立てたような岩壁で、水は冷たい。ここは盛夏の熊鷹族つれで、或は取場ゲルーや、文字通り清遊をするにふさわしいところである。

峠を越へた紐と、下から車で来た車中と一しよになり十三人ほどの同勢は、村へ入連の案内で岩屋郭路を見て、香の原に下る。

香の原では庵の境内に何基かの古塔を見え。次のような空塔と一石彫の土輪塔と、嬰児を抱いた仏像を彫らういと見る。惜しいことに文字がはいつていない。すくなく天満社の老杉ととりまいて見る。香の原が空洞になつていて、おきさびが棲んでいるといふ。

小川香の原の空塔



いふ。佐伯鬼殿でこれに巫歌するまのかあまうか。遺世に元祿墓と左すねなりして下ると、落石左に庚申塚があり、見事な庚申塔がある。ここをけて、大く都落の入り口にはきつと数基の庚申塔があるが、よその見かけるよう女僧軍の文字だけのものでなく、青面金剛の五姿(いささか推状であるが)日月を頭上に、六臂でそれ(の)ものを持ち足に邪鬼をふまえて、侍者となつたか。羅多三様もなかく、入念に刻み出されている。

もと合鼓場であつた公民館で昼食となり、差舞にビールまでおきて話し、又長さん外十数人の村の方々に「小川の古い時代」について話し合ひ。戸内南太郎さん、九十歳と超えられたが、記憶正しく話しつたりして、外の方々もなかく、法隆寺、次から次と話が出てくる。とまるところがない。且つここで経路したことをない史談ハリーと時であつた。

村オウの歴史動力を謝して、又車の中世族になり小羊に向こう。

併座で車をおりて、対岸の奇跡となかめ、抜洞門の景観を仰ぎ、断崖の下に、お深い淵を見下した。ここには且つ釣橋が架つていた。因尾へス県道内通のころであらうか、明治何年のことであらうか。私は携行の、その釣橋の写真を撮る教育委員会の諸方氏にさし上げる。

そして諸方氏の先導で鐘乳洞に入る。ここもすばらしい景観である。それは山口県の秋芳洞の巨大ではない。返還鐘乳洞に華麗さではあるかも知れない。しかし全長は。米甜なところ、豊富な鐘乳石、石筍、石柱、右に左に窓穴の多い洞穴の多さ、変化に富んだゴーストの探検的な興味のものではない。

又秋表台のカルスト台地ではないか、かわりに天に向つて鐘のようにそそり立っている岩峰と、谷へ切りかち、又石版岩特有の風化による凹凸、樹水がしが

みついている岩壁、対岸に近く迫っている米光山の威容、淵をなす或は流んで響く香取川の清流は、果南芥一の観光地であると言えよう。左に風連のように大分別府に近くなく、国道からかなりはなれているのが欠点であるが、今度マイカー時代、老人を供つて、親戚し、釣りを楽しみに通して

時間があまつたので、少しはなれた小羊の部落に入り、庵の庭をしろへる。ここにも庚申塔や一石一宇塔が並んでいる。又明照の末子佐伯からこの村に廻り住んでいた山口虎生を敬慕した碑がある。一左が、もう当時の故の呪は八十近い老人になつて、生き残つた人も多くない様相である。

一岡千代止時羊二のバスで帰路についた。まことに恵まれた一日で、特に小川御墓の方々から左に左に御辱意日、感謝に伝えたい。おらつた民俗的な古い時代の庶民生活の遺物にも多く懐いて得るところが多かつた。

やはり現地を歩いてしらべることである。(羽柴幹事)

佐伯史談 原稿募集

と申すると一部定連の及が独巨している観がある。一般会員の方々の寄稿を歓迎します。出来るとは御土佐伯(南郷と含む)の歴史民俗にまつた資料があるもの、御土の文化の過去、現在にまつたもので、長短は隨意ですが、四百字詰原稿用紙七枚以上が望ましい。それが本誌で二頁です。十五枚以内にとりまいて、毎月末までに。

- 内容として
・ 論説、意見、主張、感想、随筆、随筆、
・ 研究(古跡、古文書、文化財、
・ 調査・採録(民俗資料、民俗風習、伝承など)
・ 御土の人物(故人とよし、現存の方とよし)
・ 探訪記(村や浦を巡つて、長老訪問、趣意)